エンゲージメント
第 4 章
Kumari

〈第３章　あらすじ〉

明け方の海辺で一人の男性の姿がローザの目に止まった。
彼は数日前に見かけたブロンズヘアの男で、ローザが歩み寄っても気付くことなくベンチに座り、俯いていた。
ローザは持参していたハイビスカスのハーブティーを、紙コップに注いで男に差し出した。
すると男は誰かと勘違いをしたのか、
「ミ・キ・コ？」
そう言って、驚きを隠せない表情で顔を上げた。

男はフランス人で、ミシェル・フローレンと名のった。その後、彼は自分の職業を「画家でした」と過去形でローザに告げたのである。
ミシェルは新崎（しんざき）美希子（みきこ）という女性とマウイ島で暮らしている。だが、今の彼の生活はアルコールに浸り、指先はすでにアルコール依存で震えが見られ、絵筆を持つこともなくなっていた。
この数日彼は、ローザのことを待っているかのように、夜明け前の砂浜のベンチに座っていた。そんな彼にローザは、誰かの見えぬ力にでも操られているかのようにこう告げたのである。
「ミシェル、目の前のマウイの太陽を、あの光を、出来るだけ多くの人に見せてあげなさい。それが、あなたに託された神の仕事です」

しかし、アルコールに侵されたミシェルの手は、絵筆を持っても震えが止むことはなかった。自分のアトリエで苛立ちがピークに達した彼は、空の酒瓶を、ドアのほうをめがけておもいきり振りかざした。だが、その時だった、ふいに美希子の顔が浮かんだ。その映像とガラス瓶の割れる音を聞いた彼は、束の間、意識を失くした。
意識が戻ると目の前には、顔から大量の血を流した美希子が座り込んでいた。

その頃、物音ひとつしない真夜中の刻に、ミシェルの家で怪我人が出ていることなどローザは夢にも思わずに、これまでのミシェルの境遇について考えていた。

第　４　章

『ローザ、パパのお国である日本の字はとても難しいわよ。パパ自身がそう言っていたのですもの。　　ひらがな、カタカナ、漢字、その三つの文字で成り立っていて、それぞれにとても奥が深いものだって。例えばそうね…、日本の漢字はね、生まれる、正す、声、誓う…、それらの言葉を漢字にすると、全て同じ言葉で、セイ、とも読むそうよ。それにね、ひとつの漢字にはいくつもの読み方があるとも言っていたわ。私がね、ヒラガナやカタカナだけで文章を書いてもよいのですか？　と、そう尋ねた時、パパは黙って頷いた、だけどね、そのあとにしばらくパパは何かを考え込んでいたの。そして、こんなことをママに言ったのよ』

『日本語の、カタカナの文字には何か心を動かす特別な力があるように感じます。僕がこの戦地に来る前に、医師団としてこの地で働いていた友人から一通の手紙を頂きました。そこには、
ココニキテ、チカラヲカシテホシイ、タスケテホシイ、とすべてカタカナで書かれていました。
もし、あの手紙がカタカナで書き綴られていなければ、今、僕はこの戦地（ばしょ）にいないような気がします。漠然とですが、そんな気がするのです。 その友人は…もう…この世にはいませんが…』

『それとママ、パパはどうして日本語の、手当ての意味を、怪我の治療のことだって、ママにすぐに教えてくれなかったのかしら』

『それはね、ローザ…』

懐かしい母親の声がした。と、ふいにパラパラとノート の捲（めく）れる音がしてローザは 目を覚ました。数日前から亡くなった母親が度々夢に現れる。ローザは十三歳の時、日本語をマスターしていくにつれ、なぜに父親は日本語の「手当て」の意味をすぐに母親に教えなかったのだろうかと、そんな疑問を抱いたことがあった。その当時に聞いた母親の言葉をノートに書き綴ったことがきっかけで、「覚え書き」のノートは作られていったのである。

ローザは、手元に置かれているノートの第一冊目の第一頁を開いた。

十三歳の時の文字は今しがた夢の中で見た、「それはね、ローザ…」と言って、母親が説明してくれた続きの言葉がしっかりと書き綴られいていた。

人が人を想う…
そのエネルギーが、本当の意味でひとつに交わることが出来た時、身体に負った傷や心に負った傷、いいえ、それだけではないわ、この世の、あらゆる傷という傷を癒すことが出来るのかも知れませんね。 これを日本の人は「手当て」と呼んだ…
日本の人は、昔からその理を知っていたのでしょう。
手当て、の本当の意味が知りたかったら、日本の「キ」の漢字を学ぶとよいかも知れません。
しかし、これはかりはそう簡単に理解出来るものではないでしょう。

確かにその当時のローザには難しい話だった。
本当の意味でエネルギーがひとつに交わるとは…。
そのことをローザは母親に訊き返そうとしたが、母親のほうが先に口を開いた。
「ローザ、もしもあなたが一人きりになってしまった時には、このマウイの太陽に何でも語りかけてご覧なさい。必ず答えを下さるはずです」

*　　　　　　　　*

　テアテ。
　今日、ローザは久しぶりに日本語の、その言葉を口に出した。今朝方、彼女はフランス人画家であるミシェルを相手に、その日本語を言ったのである。
「美希子（かのじょ）が目を覚ましたら、わたくしの家へ連れていらっしゃい。傷の手当をして差し上げましょう」と。

　早朝、ミシェルの顔色は酷く悪かった。外の暗さだけからではない青白い顔色で、彼は俯き加減にベンチにいた。自分という人間をこの世から消し去ってしまいたいような、そんな表情で足元あたりをじっと見つめていた。
「ミキコの顔を傷付けてしまった…」
　長い沈黙のあと彼はひとり言のようにそう呟いた。日本語だった。
　彼の言葉が理解できたローザも同じ日本語で話し出した。
「美希子（かのじょ）が目を覚ましたら、わたくしの家へ連れていらっしゃい。傷の手当てをして差し上げましょう」
　英語訛りのないきれいな日本語だった。
　ミシェルは美希子といる時は日本語であるが、ローザといる時はすべて英語で会話をしていた。ローザが日本語を話せることを知らずにいた彼は、驚いて顔をあげた。
「傷付けた場所は、顔のどのあたり？」
　ローザの落ち着き放った目が彼を見る。女性の顔を傷付けたという話のあとでもローザはミシェルに向かって感情的になることはなかった。
「ミシェル…」
　その穏やかなローザの声に、ミシェルの気持ちも徐々に和らいでいく。
「初めてあなたの声を聞いた時、ミキコの声にそっくりで僕はとても驚きました。今の声もそっくりです」
　彼はそう言い、そのあとに「美希子の傷は右のこめかみのあたりです」と、小さく答えた。

ローザは「そう」とだけ答えた。夕べ何があったのか、何故にミキコは顔に傷を負ってしまったのか、それらを追求するようなことはなかった。それでも胸を刺すような切なさは込み上げてくる。

以前、ミシェルの家の、ウッドデッキの上で佇んでいた黒髪の女性を見かけた時から、なぜかローザは彼女のことが気になっていた。いつか会わせて頂きたいと思っていたが、まさかこんな形で彼女の話が出るなど夢にも思っていなかったのである。

「ミシェル、これも何か大切な意味があるのでしょう」

ローザは昇る朝陽を見つめたまま、ミシェルに、そして自分自身にそう囁きかけた。

ミシェルはローザの特殊な能力のことはまだ知らずにいる。自分はヒーラーであるとローザが自ら人に話すようなことはなく、雑誌やテレビの取材等も全て断ってきた。そして何よりローザの普段の洋装や化粧も、暮らしぶり同様にとてもシンプルなものだった。そのせいか近くの別荘に来た人達や観光客、海辺を散歩する人達は「こんにちは、マダム」と、気軽に声を掛けていく。日よけの帽子を被り、庭の植物に水を与えているローザの姿は、ヒーラーという特殊な職業を他人に感じさせることはなかった。しかしその一方でローザの仕事の依頼は絶えることがなく、アメリカでは、日本では、どこそこの国では名の知れた人なのだと、そのような説明を受けては、「会って頂きたい」と、何本もの電話が毎日のように彼女の元に入った。今までに各国の有名人を数えきれないほどローザは見てきており、ローザの住んでいる家はそんな人物が所有している別荘でもあった。

人の縁とは不思議なものであるとローザはつくづく思う。自分を必要とされながらも会うことの出来ぬ人達への無事を祈り、その反対に、依頼された訳でもないのに、救わねばと、その者に自ら手を差し伸べることもある。そして、そんな人が現れた時、決まってローザは蓮の花の香りにも似た芳艶な香りを感じ取るのだった。ミキコの顔を傷付けてしまったとミシェルから打ち明けられた時も、ローザはその花の香りを感じ取っていた。

「日本に愛し合う男がいながら、なぜに美希子は僕とマウイに来たのだろうか？　日本にいるアイツもまたなぜに彼女を手放したのだろう。なぜこんな僕に…」

ミシェルはそう呟いたあと組み合わせている指に額を付けて、しばらく俯いていた。

＊　　　　　　＊

昨夜、ミシェルは美希子を部屋のソファーに座らせると、自分も彼女の隣に座った。美希子は傷口にガーゼを当てたまま長いことそこにいた。ミシェルが傷口を見ようとしても彼女は、大丈夫よ、という言葉を繰り返すだけで傷口を彼の目に晒すことはなかった。

部屋に掛けられているアンティーク時計の針の音がやけに大きく響いていた。その時計はマウイ島に来た時、美希子の部屋に掛けるためにミシェルが買ってきたものであるが、美希子はその音が、シャッキンシャッキン…借金借金…と聞こえる感じがして嫌だと言った。そんな理由から時計は、アトリエと兼用しているミシェルの部屋に掛けられ、ソファーの置かれている壁の上で毎日動いているのだった。それ以来、美希子は彼の部屋に来ることもあまりなく、何かの用事で部屋を訪ねてもソファーに腰を下ろすことはなかった。そんな彼女が昨夜はそこに長いこと座っていた。

美希子の口から、大丈夫よ、という言葉が出るたびミシェルの胸は訳もなく苦しくなった。昨夜だけでなく、彼女がひとりで外出しようとする際に、大丈夫よ、と言うことがあるが、そんな時、彼は力ずくで美希子のことを家の中へ引き込んでしまうことが度々あった。なぜそうしてしまうのかはわからないが、ミシェルに握られた美希子の腕は、尋常でない彼の力によって青アザが絶えなかった。

ソファーに腰を掛けるとミシェルは、どうして僕とマウイ島に来たのかと、美希子に尋ねていた。

静かに時間は流れていく。

美希子は傷口を押さえていたガーゼを新しいものに替えると、顔を押さえたまま床に目を落とし、そして自信なさそうにこう答えたのだった。

「誰かから聞いたことがあるの、マウイ島は波動のよい所だから必ず行きなさいって。でもね私は馬鹿だからこの話を誰に聞いたのか忘れちゃった。ミシェルこそどうしてマウイ島に別荘を？」

そう答えたあと、彼女は首を傾げるようにしてミシェルを見た。

美希子はマウイ島に行くことを誰かに勧められた記憶はあるのだが、それが誰であったのか思い出せずにいた。だがそんな彼女を見て、「僕と一緒に来たかったから、なんていう三文台詞を言わないでくれてよかったよ」

そう言ってミシェルは笑みを浮かべた。

今のミシェルの言葉に美希子は、「私って本当に馬鹿だわ」と言って笑いを堪えた。「確かに、流れ的にはその三文台詞をまずは言うべきだったかも…」
「いや、いざ言われると言葉に詰まるからこのほうがいい。それより実は、僕もどうしてマウイ島に別荘を買ったのか本当のところはよくわかっていないんだ。ただ僕も君と同じで、マウイ島は波動のよい島であると聞いたことがあって、多分…それでかな」
そこまで言うとミシェルはふと気が付いた。自分もその話を誰から聞いたのか覚えていない、ということを。波動がよいと言われている世界の島をあげたらマウイ島よりもはるかに注目されている島は多くあるはずである。だが偶然にも二人のあいだではマウイ島が一致したのだった。
「ミシェル…」
考え込んでいるミシェルの顔を美希子が覗き込んだ。
この時、ミシェルは美希子に見つめられながらも束の間目を閉じた。マウイ島の話も頭から消え、今後は（ああ、その声）と彼は思った。
「ミキコ、その声…」
そう言ってミシェルは目を開けた。
「声？」
美希子は不思議そうに訊き返した。
「僕の名前を呼んだ時のその声が、彼女とそっくりなんだ」
「彼女？」
美希子には、今のミシェルの話は呑み込めていない。
「明け方の砂浜で出会った、ローザという女性の声が、君の声にとてもよく似ているんだ」
この時、ミシェルは初めてローザの存在を美希子に話した。
だが、話はそれ以上進まなかった。このまま話を続けたら、マウイ島の太陽を描きなさいとローザに言われたことを口走ってしまいそうで、ミシェルは口をつぐんだ。自分が画家として再起不能であることは美希子も感じているはずである。だからその話には触れたくなかったのだ。
反対に美希子のほうはその女性の話を聞いてみたいと思ったが、それを遮るように手で押さている傷口のガーゼはすぐに鮮血に染まった。何枚もの替えを必要とし、その処置に追われているあいだにローザの話は立ち消えてしまった。薬箱にガーゼの予備がなくなるとミシェルは部屋に置いてある新しいタオルで美希子の傷口を押さえ、「明日…病院へ行こう」と言った。
美希子は黙って首を横に振った。そしてこう答えた。
「私なら大丈夫よ」

「……」
　この時もミシェルは束の間目を閉じ、今の美希子の返事に（その言葉も…）と思った。
　美希子の声とローザの声はよく似ていて、不思議に思う。でもとても心地よい声である。だが反対に、美希子が何気に言う、私なら大丈夫よ、という言葉はミシェルを不安にさせた。これも不思議に思うが、その訳はわからぬままである。「私なら大丈夫」と彼女が言う度、彼の胸に言い知れぬ不安と怒りが込み上げてくる。美希子が忽然と自分の元から消えてしまいそうでたまらなくなる。大丈夫なんて嘘だろうと思う。嘘をついて僕の前から忽然といなくなってしまうのだろう、とミシェルは思うのだった。
　そんな彼の気持ちに気付いていない美希子は、また、
「私なら大丈夫よ。ミシェル、おやすみ」
　そう言って彼の部屋をあとにした。

　その晩、美希子の顔を傷付けた出来事が夢であってくれたらと、ミシェルはそればかりを祈っていた。一睡もできず、そのせいか顔色は悪く、足もどこか地に足が付いていない感覚だった。
　それでも彼は、いつもの夜明け方の時刻、海辺に出かけてローザに会いに行った。
　そこで美希子の怪我のことを知ったローザは、ベンチを離れる際、彼にこのようなことを言った。
「今日はテアテなどの難しい日本語が出てきましたね。これも誰かのオテハイなのでしょう」

＊　　　　　　　　＊

『ローザ、初めてあなたの声を聞いた時、ミキコの声にそっくりで僕はとても驚きました…』

『明け方の砂浜で出会ったローザという女性の声が、君の声にとてもよく似ているんだ…』

　その日、ローザと美希子はミシェルから聞いた話をほぼ同時に思い浮かべていた。
　カーテンを開けると、多くの人達で賑わっている白い砂浜が美希子の目に映し出された。昨夜は四時間程の睡眠しか取っておらず、彼女が目を覚ました時、強い日差しを放った太陽は真上にあり、朝という時間は当に過ぎていた。美希子は太陽の光で一瞬、視界を失ったが、そのままテラスへ目を向けると視線の先にミシェルの姿がぼんやりと浮かび上がった。
　ふたりの部屋はそれぞれ一階にあり、テラスはリビングからも出られる広い造りのものだった。ミシェルはテラスのテーブルに座ってボンヤリと海辺を眺めていた。
　怪我をした美希子のこめかみは痛みが治まることはなかった。傷口にはガーゼが張り付いている。目が覚めた時美希子は傷口の状態を見ようとしたが、出血するのを恐れてガーゼを剥がす手を止めていた。心臓の鼓動に合わせるように顔の右側が痛むのを感じながら、石のように動かずにいるミシェルの姿を美希子はしばらく見ていた。彼は素足のままだった。
　ミシェルの足には昨夜美希子が手当てをした包帯が巻かれていた。昨夜は彼もガラスの破片で足の裏を数ヵ所、怪我をしていたのである。
　美希子は自分の部屋を出て、ゆっくりとミシェルの元に歩み寄った。
「…シェル…」
　思いのほか声は出ない。
　美希子の声でミシェルは顔を上げた。
「……」
　大きなガーゼを顔に当てた美希子がすぐ傍に立っていたが、ミシェルのほうも声にならなかった。
　じっと美希子の顔を見ているとマウイ島に来てからというもの、ずっと孤独であった彼女の心情が痛いほどミシェルの胸に伝わってきた。

僕は今まで何をしていたのだろうか…。
昨夜はそのことばかり彼は考えていたのだった。
「ミシェル…昨日、あなたが話してくれた、その…ローザって人に、わたし、会ってみたいの」
一夜が明け、ローザに会ってみたいと美希子は言った。
ミシェルは何も聞こえていないかのように、しばらく無反応のまま彼女の腕に広がっている青い斑点をじっと見つめていた。絵筆を持てば震え出し、美希子が忽然と自分の元から居なくなってしまうのではないかと思うたび、力ずくで彼女の腕を掴んでしまう、そして昨夜、その手はついに空の酒瓶を投げつけ、美希子の顔に大きな傷を負わせたのだ。彼はそんな自分の手がたまらなく嫌になった。
沈黙の中、美希子の顔の傷口は異様に痛みはじめた。
今の話はなかったことにして欲しいと美希子は言おうとしたが、ミシェルが先に白い椅子から立ち上がった。
「ミキコ、今からローザの家に行こうか」

＊　　　　　　＊

『ボクハ、イママデ、ナニヲシテイタノダロウカ…』
テラスで冷めたハーブティーを口に運ぼうとした時だった、ふいにミシェルの声が聞こえたような気がしてローザは周りを見渡した。近くにミシェルの姿はなかったが、砂浜で戯れている人達をボンヤリ見ていると、遠い距離でも一際目立つ黒髪の女性がローザの目に映った。女性は恋人らしき男性と一緒に歩いている。丈長の白いワンピースのようなものを着ているせいか、女性の長い黒髪はとても目立ち、周囲の人達が振り向いている様子さえもはっきりと見えていた。
だが、その時だった、
「彼女の傷口に手をかざしなさい。彼女の傷口に手を当てて、再生の力を与えなさい。その傷口に奇跡が起きるように、あなたの体を通してワタシの力も送ろう」
ふいにローザの中に言葉が降りたのである。
その言葉を聞いたローザは、もしや、と思った。あの人達はもしかしたら…と。
ローザは黒髪の女性の傍にいる男性に目を凝らしていく。遠くて顔はわからないが姿形はミシェルに似ていた。少しずつではあるが男女はローザの家に近付いて来ている様子だった。
ミキコはマウイに来てからもずっと家の中にいて僕が監禁しているようなものだと、前にミシェルが言っていたことをローザは思い出した。波打ち際を歩いている彼女のほうはとても楽しそうで、暗く閉ざされた世界からやっと太陽の光を浴びることが出来たような、そんな喜びを体で表現しているように感じられた。

＊　　　　　　　　　＊

綺麗な二重(ふたえ)瞼(まぶた)と黒い睫毛に縁取られた愛らしい瞳だった。

輝く長い黒髪、体の線が引き立つ涼しげな白のロングワンピース姿、そして美しく整った顔立ちの彼女を見た時、ローザは日いずる国の女神様が目の前に現れたような錯覚を覚えたものである。そして瞬時に、彼女を抱きしめたい、とも思った。

ふと気付くと外は暗くなっていた。

それでも何処からともなく人の笑い声は響いており、その声をぼんやりと聞きながらローザは何時間もテラスに座り込んでいた。数時間前に出会った、新崎(しんざき)美希子(みきこ)という女性を想い浮かべながら。

（彼女の顔に張られた大きなガーゼを見たからだろうか、それともこの地に似合わぬ白い肌を見たからだろうか、それともその白い肌に浮き出た沢山の青いアザが痛々しかったせいだろうか…いや違う、あの時、ミシェルが感じたようにわたくしも感じた、美希子の顔を見た瞬間、やっとあなたに巡り会えた、と。）

その日の午後、ミシェルは、顔に怪我を負った美希子という日本人女性を連れてローザの家にやって来た。彼女を見た時のローザの衝撃は思いのほか大きかった。ローザの思ったとおり波打ち際の砂浜を歩いていた男女は、やはりミシェルと新崎美希子だった。

ドアのチャイムが鳴り、玄関の扉を開けるとそこには東洋の神秘の美しさを放った女性が目の前に立っていた。美希子は小さな声で「こんにちは」と言ったが、ローザはそれには答えず彼女の顔をじっと見つめていた。

「紹介します。彼女が美希子(みきこ)です」

そう言ってミシェルは美希子の肩をそっと抱いた。

美希子は日いずる国の女神という表現にぴったりの黒髪の美しい女性だった。しかし彼女の顔には五センチ大のガーゼが当てられており、白く細い腕には所々に青いアザが見られた。

「はじめまして」

美希子は日本語で挨拶をした。微笑みにも取れる穏やかな表情を見せてゆっくりとローザに頭を下げていく。

この時、 ローザと美希子は互いに顔を見合わせると、胸の中で同じ言葉を交わし合った。

（あなたに、とてもお会いしたいと思っておりました）

「どうぞ、入って」
　ローザは日本語でふたりを家の中に招き入れた。
　美希子は片言の英語しか話せない。ミシェルの傍にいる限り現地の人と会話する機会も少なく日本語で十分だった。ミシェルのほうは英語、日本語をこのマウイ島で器用に使いこなしていた。ローザもその日は美希子のことを考えて日本語で応対していた。
　部屋の扉が開かれると、奇麗に磨かれているフローリングのリビングが広がった。リビングの真ん中には大きなソファーセットが置かれており、出入口と向き合うように一人掛けの大きな籐（とう）の椅子が置かれていた。入って左壁側に重厚感ある木製の棚があり、そこにはドライハーブの瓶が沢山並んでいた。美希子はその瓶の多さに驚き、「わあ」と声をあげて近づいた。
　右側は広いダイニングキッチンへと繋がる。途中にローボードが置かれていて、そこには一目見て高級品とわかる西洋骨董、ボードのガラスケースの中には年代物の食器類が沢山並んでいた。
　リビングの扉が開かれた時、ミシェルの目に一番に映ったものは大きな籐の椅子だった。ローザが普段使用しているものだと思われる。だがこの時、彼はとても不思議な光景を思い浮かべていた。扉を開けるとローザがゆったりとそこに腰かけており、「お帰り」と、彼女の優しい目に見つめられる。その時のローザは本当に優しい目をしているのだ…。彼は初めて訪れた家でそんな想像をし、どこか懐かしささえ覚えていた。
　一方、美希子のほうは引き寄せられるように棚のハーブの瓶の前で足を止めると、懐かしいものを見るようにドライハーブの瓶を手に取った。
　ローザが、「どれかお入れしましょうか？」と丁寧な日本語でハーブティーを勧めたが、聞こえていない様子で美希子はいつまでも棚の瓶に目を向けていた。
　ミシェルが笑い出す。「この人、可笑しいでしょう？」と、彼は美希子を見てそう言った。

「ハーブを扱っているショップに行くと美希子（かのじょ）はいつもこうなんです。普段ハーブティーなんてあまり飲まない人なのに、時々、専門家みたいなことも言うんですよ」
　ミシェルはハーブを見ている美希子の気を引こうとして、彼女の肩を抱き寄せた。
「今の話は私のこと？」
　ようやく美希子はハーブの瓶から目を逸らし、ミシェルの顔を見た。
「そうだよ」
「専門家って？　何のこと？」
　ドライハーブに夢中になっていた美希子は、ミシェルがローザとどのような話をしていたのかよく聞いていなかったのである。
「ほら、前に君、フランス産のハーブティーの香りを嗅いですぐに、これは貴重な野生種だって言ったことがあるじゃないか。　思い出した？　あれは確かラベンダーだったよね？」
　ミシェルはマウイ島に来てからの美希子のことはよく覚えていた。本人の美希子でさえ、いつの話？　と訊き返すほど些細なことでも覚えているのだった。
　以前、二人でマウイ島の大きなショッピングモールに行った時、ドライハーブが計り売りされているショップで美希子は足を止めた。見本として置かれていた小瓶の中のハーブの香りを楽しんでいたが、乾燥ラベンダーの花の香りを嗅いだ時、これは貴重な野生種であると、彼女はミシェルに教えたのである。そしてさらに深くその香りを吸い込むと、フランスのかなり標高の高い場所に生息していたもに違いないと、そのラベンダーの生息時の環境まで話しはじめたことがあったのだ。
　色とりどりに置かれているハーブティーには説明書もついていたが、それらはすべて英語で書かれていた。美希子の言うとおりラベンダーは、原産地・フランス、と記されていたが英語を不得意とする彼女がその説明書に目を向けたとは思えず、彼女は自分の嗅覚だけでハーブの生息地を言い当てたようだった。どうしてわかったのかとミシェルが尋ねた時、彼女は説明書のことは何も言わず、ただ何となくそう思っただけと答えていた。
　また、彼女はハーブの知識は何もなかったがドライでもフレッシュでも香りを嗅ぐだけで、それらが優れた効能があるかどうかを見分けることができるようだった。それについても美希子は、ただ何となくそう思っただけ、と答えていた。

「ミキコはラベンダーがお好きなの？」
　ローザは不思議そうに美希子の顔を覗き込んだ。
「いいえ」
「ではどうしてそのラベンダーが栽培されたものではなくて、野生のものだってわかったの？」
「んー、あまり深く聞かないで下さい。ただ何となくそう思っただけなのです」
　ただ何となくそう思っただけ、美希子の定番の返事ではあるが、本当に美希子自身も自分のことがよくわかっておらず、何度か首を傾げた。
　確かにミシェルが知る限りでも、美希子は日本にいた時もマウイ島に来てからも、ハーブティーを好んで飲んでいる様子はなかった。
　美希子が首を傾げるたび長い黒髪は右側へ流れ、右目のすぐ脇に張られているガーゼが露わになっていく。また腕には青いアザが浮き出ており、それもローザの目に痛々しく映っていた。本人の美希子は自分の顔の傷のことなどすっかり忘れてしまっている様子で、またドライハーブの瓶に目を向けた。
「最近ハイビスカスのハーブティーを彼が飲むようになったものですから、私も一緒に飲んでいるんですよ。ね、ミシェル」
　美希子はハイビスカスの花が入れられている瓶を見て、思い出したようにローザにそう言った。ミシェルがハイビスカスのハーブティーを毎朝ローザから振る舞われていることを、美希子は昨夜の話で知ったのである。
　するとまたミシェルも思い出したように、「そうそう」と言い、
「そのハイビスカスのハーブティーを作っている時もミキコは、ハイビスカスにはローズヒップとレモングラスも一緒にブレンドして、甘味料にはステビアの葉を少し入れるとよいかもしれないと言ったのです。まあ、そう言っただけで実際には作ってはくれませんが…」
　彼はまた美希子のハーブの知識について、奇妙な話をローザにしたのだった。
　だが、ローザはミシェルのことも少し不思議に思えていた。専門に扱う人や料理人でもない限り、なかなかハーブの名前は覚えられないものであるが、フランス出身からだろうか、ミシェルも美希子が言ったハーブの名前を正確に記憶していたのである。
「日本のデパートかどこかでそのブレンドのレシピを見たのよ。きっとそうだわ」
　美希子は他人事のように自分のことをそう答えると、もうハーブの話はやめてほしいと言わんばかりの視線をミシェルに向けた。

　この時のミシェルは穏やかな表情で軽い笑みも見せていたが、病院に行けば今の彼の精神状態は鬱病と言われる可能性もあった。またはアルコール依存症、不安恐怖症とも。美希子の腕を掴んだ瞬間、なぜに青い斑点が浮き出るほど力を入れてしまうのか…、ミシェル自身もわかっておらず、そして、いつか美希子は黙って自分の前から去っていってしまうのではないかという恐怖観念を常に抱いている。僕は重症だ、と当人のミシェルも思っているがどうにもならなかった。

　ローザはドライハーブの入った瓶をいくつか手に取ってダイニングキッチンへと向かった。そして、間もなくしてリビングのテーブルの上に透明なガラスのティーポットが置かれた。

「このままで、１０分くらい待ってね」

　ローザが置いたそのティーポットを見た美希子は、あらぁ、と嬉しそうに言ってテーブルに近づいた。今しがたミシェルの言った、美希子のハイビスカスのブレンドでローザはハーブティーを作って来てくれたのである。

　ローザは、ミシェルと美希子にソファーに腰をおろすよう促した。

　美希子はティーポットのまん前に座り、ハイビスカスの花から煙のように滲(にじ)み出てくる赤い色素をじっと眺めていた。ミシェルのほうは美希子と向き合うようにソファーに腰をおろすと、リビングに置かれている家具や調度品に目を向けていた。それらは埃をかぶることもなくクラシカルな美しさを放ち、彼の目を楽しませている。

「きれい…」

　かすかな美希子の声が聞こえた。

　ミシェルが美希子に目を向けた時、ハーブティーはすでに三客のガラスのティーカップに注がれていた。ガラス越しに見える赤く透明なハーブティーは、普段家で飲んでいる市販のものとは比べ物にならないほど鮮やかな色を放っていた。

　ローザは籐の椅子に腰をかけた。「どうぞ」と美希子に声をかけ、美希子がハーブティーを口に運ぶとローザも自分のティーカップを手に取った。

　三人のあいだに沈黙が流れていく 。

「ミキコ、その傷、わたくしに見せて下さる」

　ローザの声は落ち着いていたが、いざその時が来ると美希子もミシェルも少しの緊張を覚えた 。

　ローザが美希子の元に歩み寄ったのは二杯目のハーブティーを蒸らしている時だった。タイミングを見計らったかのように三人が落ち着くと、ローザは美希子の顔の傷について触れてきたのである。ローザは椅子から立ち上がるとソファーに座っている美希子の横に腰を掛けた。

　自分達に会った時点でローザが大袈裟に騒ぎ立てないでくれた気づかいは、美希子にはとてもありがたかった。 美希子は促されるように自分の顔に張ってあるガーゼを静かに剥がしていく。傷にガーゼが張り付いていることもあり美希子は痛みを堪え切れずに、「痛てて」と何度か小さく声を出した。そんな彼女を見てローザは軽く笑った。

　美希子の傷口が露わになっていく。

「病院へ行きなさい」

　一番に、ローザはそう言った。「このままでは化膿してしまう、綺麗な顔が台無しになってしまうわ」と。

　だが、そのローザの言葉に美希子は黙って首を横に振った。そして 言葉にできない想いをローザに伝えたのだった。

（病院へ行きたい、でも病院へ行ったらミシェルが疑われる、腕にもこんなにアザがあるし…だけど、彼は何も悪くないのです）

　ミシェルも美希子の傷口を見ることとなった。思ったとおり傷はかなり深く、彼は言葉を失くした。そんなミシェルのことを気づかうように美希子は口を開いた。

「でもねローザ、不思議なのよ」

　美希子は、「この辺り」と言い、傷口のすぐ真下あたりを指で触れはじめた。

　ローザは美希子が指で触れた場所を見た。すると今回の傷とは別に傷口のすぐ下に、うっすらとした白い線が浮き出していた。

「あら、ここにも傷跡があるわね」

「ローザにはこの傷が見えるの？」

「ええ。白い傷跡がうっすらと浮き出ているわ」

「嘘みたい」

　ここにも傷跡があるわね、と言ったローザに美希子は驚いている。自分から話題に出した傷ではあるが、どうしてローザの目にその古傷が見えたのか不思議でならなかった。美希子のその傷跡は誰もが、見えない、わからない、と言うものだった。本人の美希子でさえ肉眼ではわからず、指の感触で何となくそこに古傷の跡があることを感じ取るだけだった。

「それで、この古傷はどうなされたの？」
　ローザの目には、美希子の古傷ははっきりと見えていた。
「私が子供の頃、亡くなったおばあちゃんの家で飼っていた猫に、おもいっきり後ろ足で蹴られてしまって、その時の傷なんです。そしてまた今回も同じ場所を怪我してしまって。猫に蹴られた時も、顔の怪我のことよりも瞳が無事であったことを喜んだのよ。そしたら今回もまた同じ喜びを。ね、ミシェル？」
「……」
　ミシェルは少しばつが悪そうに黙って頷いた。
　美希子のいうとおり、今回のガラスの破片で負った傷も子供の頃の古傷も、あと数ミリずれていたら彼女の瞳を直撃していたと思われるが、双方ともギリギリのところで免れた。それでもミシェルのことを全く責めない美希子の口調は、傷を負った時同様にローザの前でも重苦しい空気を漂わせることはなかった。
「瞳を傷付けなくてよかったわね」
　ローザはそう言いながら美希子の怪我の手当てをはじめていく。
　美希子は顔の傷の手当てをローザに委ねながら、その時、感心したようにこう呟いた。

「こんな偶然ってあるんですね」

　ローザは自分で作ったハーブ水をガーゼに含ませ、美希子の傷口を消毒した。そのあとは軟膏を傷口に塗りつけていく。軟膏からはラベンダーのような、木の香りのような植物を感じさせる香りが漂った。軟膏もローザの手作りしたもので色々なハーブのエキスがブレンドされており、そのハーブの香りは美希子の体の中に心地よく染み込んでいった。美希子の傷口に新しいガーゼを当てると、ローザはそのまま優しく手を当てた。
「これはねマウイで古くから伝わる怪我の治し方なのですよ。美希子、この傷をわたくしに預けてください。いいと言うまで目を閉じていて下さいね」
　傷口に手を当てて治癒力を高めていくのは、本当はローザ独自の治療法だった。だが彼女はマウイ島に伝わるものだと美希子に説明した。美希子はそれを素直に信じ、瞼を閉じていく。
　美希子はローザの手に守られているような心地よさの中で、徐々に傷口が温かくなっていくのを感じ取っていた。しばらくするとその温かさは傷口だけでなく顔全体に広がり、そして全身へと広がりはじめ、体の力が抜けていくのがかわった。そのあとは軽い睡魔に襲われ、いつしか時間の感覚もわからなくなっていた。

「美希子、目を開けてもいいですよ」
　ふいに耳元で囁かれたようなローザの声で、美希子はゆっくりと目を開けた。

　だが、辺りを見渡し、美希子の眠気は一気に覚めた。目を大きく見開いたまま彼女はローザをじっと見ている。
「どうかしましたか？」
　美希子の大きな目で見つめられている意味がローザにはわからなかった。そんな美希子の様子をミシェルもじっとを見ていた。
「ローザ、いつ私から離れたの？」
「五分は経ったかしら。ね、ミシェル？」
「ええ。そのくらいは経っていますね」
　ミシェルも否定しない。
「……」
　それでも納得いかない様子で美希子はローザの顔をじっと見つめたままでいる。なぜなら、目を開けてもいいですよ、と言ったローザの声は耳元で囁かれた…ような気がするのだ。ローザでなければ自分のすぐ傍に誰がいたというのか、そう考えてしまうほど、その声は本当に近い場所から聞こえてきたのである。また、傷口のほうも目を開ける寸前までとても温かかった。その余韻は今でも残っており、瞼を開ける寸前までローザは自分のすぐ傍で手を当ててくれていたのだと、美希子はそう思って疑っていなかった。
「どうして傷口がこんなに温かいのかしら？」
　美希子はひとり言のように呟いた。
「日本では、治療する、という言葉を、手当て、とも言うでしょ？　お医者様や薬の少なかった時代は今のように手を当て、傷口を癒し、怪我の治療をしていたのかも知れませんね」
　ローザは美希子の疑問に答えるように言ったあと、落ち着いた姿でハーブティーを口に運んだ。
　二杯目のハーブティーは淡いグリーン色をしたミントティーで、美希子が目を開けた時にはすでに目の前のカップに注がれていた。が、瞼を閉じているあいだその注ぐ気配さえも美希子は気づかなかった。
　ハーブティーをゆっくりと味わっているローザの姿は優雅で品格を感じさせている。また異国の人でありながら彼女の、わたくし、という日本語もより高い品格を感じさせていた。

「ローザの日本語は上手すぎるわ」

　美希子はローザの日本語を褒めた。「急にどうしたの？」と言ってローザは笑い出したが、ミシェルのほうも、「確かに…」と言って美希子に共感していた。日本語の、手当て、について話していたはずだが、三人の話題はいつの間にかローザの堪能な日本語について盛り上がりを見せていた。

「褒めて下さってありがとう。残念ながらわたくしは日本には一度も行ったことはないのよ。でもね、亡くなった母は、わたくしが小さな時から日本語を学ばせて下さったの。その時の日本語を教えて下さった先生がすばらしい方だったのでしょう、当時の先生はホテルに勤めていた方でとても丁寧な日本語を使っておりました」

　ローザは昔を懐かしむかのように、少し寂し気な笑みをこぼした。そして自分の父親は日本人であることを話し、「そのような縁で母親は自分に日本語を学ばせて下さったのでしょう」と言った。

　ミシェルと美希子もローザがハーフであることは、彼女の容姿から見てとれていた。また日本語が堪能だったこともあり、もしかしたらローザは日本人のハーフではないだろうかとも思っていたが、それが明らかになると美希子はより一層の親しみをローザに覚えた。

「だけどローザの前では、私は日本人です、なんてとても恥ずかしくて言えないわ。ローザのほうが私よりはるかに日本語が上手だもの」

　今まで日本語について深く考えたことなどなかった美希子は、急に恥ずかしさが込み上げてきた。

「ミキコ、そのようなことは気にしなくてもいいのよ、それより日本人とかフランス人とか、人、という言葉を付けなくてもよい日が早く来るとよいですね。わたくしが願うのはそのことだけです」

　そう答えたあとローザは静かに席を立ち、窓辺に向かった。

　部屋の中が急に静まり返った。ローザは目の前に広がる海原の、さらに遠くを見ているようだった。

「この、人、という、たったひとつの言葉に多くの人が傷つけられ、命を奪われました。私は、ナニ人です、とそう言っただけで、その人の命は絶たれてしまい、争いがはじまってしまうのです。そんな世の中が早く終わるといいですね」

　ローザは窓の外に目を抜けたまま、静かに話し出した。

　ミシェルと美希子も外の世界に目を向けていく。穏やかに広がる海の向こうのどこかでは、自分達の民族や国益を守るための紛争が繰り広げられ、今日も多くの人達が命を落としていることを思うとふたりの胸は痛んだ。だが、そんな悲惨な出来事さえも感じさせないほどマウイ島は平和で慈愛に満ちたエネルギーに包まれていた。

「でも、どうすれば…」

　静かな部屋にミシェルの声が響いた。

「そうね…」

　ローザはそう呟いたあと、何も答えずに黙った。

＊　　　　　　　＊

　その夜、ローザは海辺を見つめたまま今日の出来事をひとつひとつ思い浮かべていた。

　そして最後にこう呟いた。

「そうね…、色々な国の血と血が一つに混じり合うことでしょう。しかしこれには神様の法則を十分に理解できなければ、シンの平和は訪れないでしょう」

第５章に続く